

クラン・コラは月に2回、ケルト音楽、北欧音楽に関する話題をお届けする国内でたったひとつのメールマガジンです。10日はライブ情報号として全国のライブスケジュールを配信、20日は読みもの号として各ライターからの寄稿文をお届けします。

この音楽にご興味のある方ならどなたでも寄稿できますので、お気軽にお問い合わせください。

CONTENTS

- (1) Jean-Michel Veillon コンサートツアーを振り返る hatao
- (2) Colleen Raney——アメリカで伝統をうたう試み・その12 大島 豊
- (3) 日本のトラッド系アーティストのCDレビュー
Shanachie "She Was Under The Tree" 大島 豊
- (4) ジャン=ミシェル・ヴィヨン & イヴォン・リオウ さんのセッション
field 洲崎一彦
- (5) オーケストラアレンジで聴くケルト・北欧の伝統音楽
第9回 ハーティ：アイルランド交響曲 吉山 雄貴
- (6) ざっくり学ぶケルトの国の歴史（最終回）
上岡 淳平
- (7) 編集後記

■ (1) Jean-Michel Veillon コンサートツアーを振り返る

■ hatao

このメルマガで度々紹介しておりました、フランス・ブルターニュのフルート奏者Jean-Michel Veillon（以下ジャンさん）とギター奏者Yvon Riou（以下イヴォンさん）の10/31～11/12の13日間にわたる初来日ツアーが無事に終わりました。ご来場くださいました皆様にはお礼をお伝えいたします。

今回は台北・関西・関東の11会場でコンサートとワークショップを開催し、300人以上の方に参加いただきました。

すべて私一人で企画・実行しました。素人公演ですから赤字になるのではと心配でしたが、結果的にはなんとか黒字で終えることができました。

ツアーを振り返り、今後につなげていきたいと考えています。

<ツアーの収支>

どんなに内容が良くても赤字が出たらイベントは失敗です。二人からは、交通費+宿泊費はすべて経費とし、飲食費は各自持ち、宿泊はホテルのシングル、出演料は別途各コンサートごとにウン万円という条件を出されていました。

私がプロのエージェントではないことと、ジャンさんの「小さな会場でもいいからできる限り空き日を作りたくない」という意向を汲んで、出演料についての条件は免除してもらいました。

ただし赤字が出たら私がすべてかぶり、CDの売上は別途全額を渡すことは絶対条件です。関西での宿泊は経費節減のため自宅を利用しましたが、結果的に彼らもゆっくりでき、疲れずに済みました。

経費は自分の分も合わせて70万円ほど、経費を引いた利益はそれなりのまともな金額が出て、CDは110枚すべて売り切れました。これにはお二人とも満足していただき、「また来たい」とおっしゃっていただけました。言い出した時点で赤字は覚悟の上でしたが、持ち出しはなく、自分としてもほっとしました。

<反省点>

初動の遅れが最大の反省です。出演交渉は2017年のうちに終わっていたのですが、2018年前半は楽器店の開業に集中しており、実際にコンサート会場のブッキングを始めたのは2018年の6月からでした。

チラシを配布開始したのは7月で、半年前には作っておくべきでした。ホテルの予約に至っては10月に入ってからで、条件の悪いホテルばかりでした。もっと早く動いていれば、音楽ホールや労音さんに企画を買い取ってもらうこともできたかもしれません。また、リスクを減らすために次回はクラウドファンディングを検討したいです。

ブッキングについては、ある会場では人が集まらず、赤字すれすれになってしまいました。一箇所の人数が多いほどチャージバック率など経済効率性が上がるので、小さな会場で連日開催するよりも、100人収容の会場を3箇所くらいに絞ったほうが良かったです。

台湾公演については今回は彼らがたまたま取った航空券が台湾のエバー航空のもので、思い入れからコンサートを企画しましたが、私の渡航費で利益が飛んでしまいました。期待していた観光も一切できませんでした。

東京はホテルや駐車場が高く、また都民の平均収入も高いようなので、東京だけ入場料を高く設定しても良いかもしれません。

CDは200枚あっても良かったと思います。これらを改善すれば、もっと余裕のあるスケジュールで日本を楽しんでもらい、より多くの出演料を渡せたはずで

<運営>

今回は私一人で企画、宣伝、販売、会計、料理や洗濯などお世話、荷物の運搬、運転、通訳から前座まですべてワンオペで行ったツアーでした。2週間予定を空けてくれるスタッフなどいるわけもなく、いたとて人件費を支払えませんでした。

それは問題なかったのですが、彼らより早起きして支度して彼らより遅く寝ていたのが睡眠不足が辛かったです。最も心配だった運転は意外と問題ありませんでした。そのうち何かあるとジャンさんから「ハタオ〜!」と呼ばれるようになったので、すっかりお世話役が板につきました。

<主催者の意義>

毎日奇跡のような演奏を観ることができ、ファンとして、音楽を学ぶものとして最高に幸せな日々でした。毎日たくさんの音楽の話を聞き、ワークショップも含めて自分が一番勉強になりました。

また、hatao & namiの演奏を3日間見て肯定的なコメントをいただき、いま取り組んでいることに自信を得られたこと。次に出版するフルート教本に、直前になって多くの付け足すべき内容を教えていただけたことは、お金を払っても得られないことでした。

音楽を学ぶ人は、世界的な一流の演奏家や先生を日本に招いてイベントをしないと、先生との結びつきが強まり勉強になりますから、短期留学よりもずっと効果的な学びが得られることと思います。音楽以外に企画や宣伝の上でも勉強になりました。

<宣伝>

今回はチラシ6000枚(配りきれず2000枚以上が余りました)、SNS、YouTube、楽器店のメルマガ、お店のホームページを使っての宣伝でした。今考えれば、フランス大使館、日本のブルターニュ関係の飲食店や雑貨店、日仏会館など宣伝協力を依頼できたところがありました。当初は思いつきませんでした。

ジャンさんはフランスでは実績があるので、新聞やプロフィールなどフランス語の資料をもらってそれらの機関にPRすればよかったです。

チラシは会場以外に配布先が見つからず、ミュージックプラントの野崎さんに頼んで、Flookのコンサートで配布をしてもらいました。それでもツアーが始まるまでチケットの売れ行きが悪く、ツアーが始まってからSNSを中心に話題作りを頑張りました。多くの方がSNSで良い感想を書いてくださったのも効果があり、後半になって一気に予約が入りました。

日本では知名度が低いブルターニュ音楽ですが、人気のあるアイリッシュに絡めた売り方は一切したくなかった。そこは私の意地でした。

<ふたりのこと>

演奏が最高なのは言うまでもありませんが、二人の人柄がおちゃめで、演奏以外の時間が楽しかったです。ジャンさんのおとぼけと、無口だけどジャンさんのボケをしっかりと拾ってあげるイヴォンさんのコンビは友達としても相性抜群です。

観光にもグルメにも興味がなく、いつも音楽のことで頭がいっぱいで、会場に着くなり楽器を取り出す二人。お腹が空いていても、疲れていても文句を言わず、その日のコンサートを最高のものにしようという集中力は、私には足りないものでした。

時間にルーズで起床時間も出発時間も守れないのですが、そのマイペースぶりも計算に入れて行動したのでストレスにはなりません。どんな時もユーモアと感謝の気持ちを忘れず、誠実に自分の音楽を届けることにひたむきな姿が最も印象に残りました。

<今後のこと>

赤字を出さずにイベントを終えることができたので、今後は「ケルトの笛屋さん」の事業として招聘公演を手がけたいと考えており、早速、同じブルターニュのフルーティスト、Sylvain Barou(シルヴァン・バロウ)氏にオファーを出しました。今後は大手エージェントは絶対呼ばないような素晴らしいアーティストを呼ぶことで、日本のケルト音楽の振興、ひいてはお店の事業の発展につながれば、好循環を生むことができます。

また、私自身が演奏家でありながら来日公演を企画することは、一般のエー

ジェントが得ることができない多大なメリットがあると感じました。万一公演が赤字になっても、少なくとも私にとっては大きな学びとインスピレーションを得ることができますし、これをきっかけにアーティストとの信頼関係を築くことができます。

以上です。今回の公演に関わってくださった皆様に、改めて感謝いたします。今後もケルトの笛屋さんの活動を支援してさせていただきますと幸いです。

最後に、本メルマガのライターでもあります、大島豊さんがブログにレビューを書いていらっしゃいます。読み応えがありますので、ぜひそちらもご覧ください。

<http://blog.livedoor.jp/yosoys/archives/54861223.html>

■ (2)Colleen Raney——アメリカで伝統をうたう試み・その12

■
■ 大島 豊

アメリカのケルト系シンガー、コリーン・レイニィの録音を聴くシリーズ。4枚めのアルバム《Here This Is Home》の2回め。

02. The Boys of Mullaghbawn

アルスター出身の Len Graham の録音が有名な伝統歌。グレアムはアーマー州南部のある地主を讃える歌とする。18世紀後半、ほとんどが不在地主である中で、謳われている Richard Jackson は所有する土地に住み、小作人の面倒をよく見たことで、後世まで名が残った。

A・L・ロイドはじめ、大部分はアーマー南部のこの地方の若者たちが、1798年のユナイティッド・アイリッシュメンの叛乱をきっかけに、複数の罪をかぶせられて流刑になったことを悼む歌とする。

まずは最も伝承に近い歌唱。

Paddy Tunney 《The Mountain Streams Where The Moorcocks Crow》, 1975

パディ・タニィ (1921-2002) は母を通じてドニゴールの歌の伝統を豊富に受け継ぎ、すぐれた声と歌唱で後続くうたい手たちのソースとなり、手本ともなった。アイルランドだけでなく、イングランドのミュージシャンにも影響を与え、スティーライ・スパンのレパートリィにはタニィをソースとするものが多い。

むろん無伴奏で、ゆったりとコブシを回してうたう。テナーとバリトンの中間ぐらいの声域。

The Irish Country Four 《Songs, Ballads & Instrumental Tunes From Ulster》, 1971

この1枚を Topic Records に残して消えたカルテット。ノーザン・アイルランドをベースとし、そのためイングランドを巡っていてA・L・ロイドの目にとまったらしい。ライナーもロイドが書いている。だが、バンドというよりは、気の合った仲間と一緒に巡っていたけしき。3人のシンガーを擁し、歌がメイン。ダンス・チューンもやるし、個々の腕は水準以上だが、アンサンブルとは言えない。楽器はホイッスル、フルート、ギター、バウロン、それに "union pipes"。バウロンはまだ後ろが開放。リーダーはダウン州出身だが、他のメンバーは各々ドニゴール、スライゴ、ベスファストの出身。イリン・パイパーはベルファストでパイプを習っている。マクピーク・ファミリーを筆頭に、ノーザン・アイルランドにパイプの伝統があったのだろう。音を延ばす時にビブラートをかける。ブランクシティ〜ボシィ・バンド以前で、その後のアイリッシュ・ミュージックに跡を残してもいないが、この録音自体の質は高い。

この曲は男声1人、女声2人のアカペラ・コーラス。女性メンバーは1人なので、多重録音。男性がメイン・メロディ、女性が上下にハーモニー。ほぼパディ・タニィ版を踏襲するが、コーラスにするため、やや簡素化している。アクセントを強調したリズムカルな唄い方でもある。二人ともかなりのうたい手。

<http://www.topicrecords.co.uk/the-irish-country-four-songs-ballads-and-instrumental-tunes-from-ulster-tsdl209/>

Tommy Makem 《Rolling Home》, 1989

自身のホイッスルのイントロ。ギター、マンドリンが伴奏につき、後半シンセサイザーが大仰なムードをかきたてる。時代を感じる。メイケムは一級のシンガーだが、ここではショウ・ビジネスに流れた平板な歌唱。他にはレン・グレアムだけが唄っている歌詞を、順番を変えて唄う。最もセンチメンタルな演奏。

Skylark 《Light And Shade》, 1992

Gerry O'Connor のフィドル、M!)irt!)n O'Connor のアコーディオン、Garry !) Briain のギターの伴奏。この3人がレン・グレアムをかついで作った一種のスーパーグループである。レン・グレアムはもともと無伴奏のうたい手で、伴奏に載せて唄うのに慣れていない。ここではバックがグレアムに寄り添い、グレアムも何とか伴奏に合わせて、等拍で唄おうとする。それが面白い浮遊感を生んでいる。唄のバックではギターのみで、間奏でフィドルとアコーディオンも加わるが、アレンジはあえてメロディからは外れて引き締める。後半、唄のバックに

フィドルとアコーディオンも加わり、厚みが増す一方で、ドローン的な付け方で唄を損なわない。

グレラムはアイルランドで現役1、2を争ううたい手であるその実力を聴かせる。

James Kelly, Paddy O'Brien & Daithi Sproule, 1995

ダヒィ・スプロールが自身のギターをバックに、ゆったりとしたテンポで丁寧に唄う。この歌は誰もが丁寧に唄う。はじめジェイムズ・ケリィのフィドル、後でパディ・オブライエンのアコーディオンが各々に味のあるサポートをする。スプロールはまだ若く、やや硬い歌唱。

The Alias Acoustic Band, 《1798-1998 IRISH SONGS OF REBELLION, RESISTANCE & RECONCILIATION》, 1998

ハーモニウムらしいドローンをバックにロン・キャヴァナがパディ・タニィ版を、コブシまでほぼそのまま唄う。キャヴァナはキャリアの初めはやんちゃな面が表に立っていたが、このアルバムは終始抑えた演奏で、一級のうたい手であることを示す。抑制が効きすぎて、ほとんど陰々滅々の域だが、賑やかに、勢いよく唄われることの多い歌の、そこではわからない美しさがにじみ出る。

Tramps & Hawkers 《The Nightingale》, 2003

3枚のアルバムのある、おそらくはアメリカのバンドで、ジャケット写真からは男性ばかりのカルテットらしい。ここでは男声二人のアカペラ・コーラス。Irish Country Four の版に近いが、声に力瘤が入っていて、悪くない。

Niamh Boadle 《Maid On The Shore》, 2015

まだ新人とっていい若手の一人。20代前半と思われる。イングランドのアイリッシュ・コミュニティ生れ育ちの由で、フィドルも弾く。こういうあまり起伏のないメロディの、地味な歌を無伴奏で唄って聴かせられるところ、シンガーとして一級品。

<http://www.niamhboadle.co.uk>

Dan Possumato 《Mostly Melodeon》, 2016

ピッツバーグ出身の、おそらくは60前後のメロディオン奏者で、歌も唄う。ジャッキー・デイリーの録音を聴いてアコーディオンを弾くようになる。

ここでは、ピアノとマンドリン、ケヴィン・バークのフィドル、本人のメロディオンが伴奏。あっけらかんと明るく唄われるのは、レベル・ソングとして唄われてきたこの歌にとっては、あるいは本来の姿かもしれない。

<https://www.danpossumato.com/>

コリーンがこのアルバムをアイルランドで録音したのは、一つにはその音楽伝統により深く浸るためという。思惑通り、アイルランドに着いてまず教えられたのがこの歌のレン・グレアム版。グレアムはこれを地主を讃える歌としているが、コリーンは流刑となった若者たちに想いを馳せる。

歌詞は当然グレアム版で、他では聴かれないスタンザがある。イントロとアウトロはスカイラーク版。ビートのとりかたはコリーンの方が巧い、というか慣れている。コリーンはむしろグレアムにならって、なるべく等拍ではなく聞えるように唄う。こういうところがこの人の面白いところで、信用できるところでもある。バックではトレヴァー・ハッチンソンのベースが効いている。

以下次号。

■ (3)日本のトラッド系アーティストのCDレビュー

■ Shanachie"She Was Under The Tree"

■ 大島 豊

シャナヒーを初めて聴いたのは《TIME BLUE》(2008)でした。もう十年前になる、とあらためて遠い眼になります。今の時代、十年というのはかつての30年ぐらいに相当しましょう。スコットランドやアイルランドの曲やそこに連なるオリジナルを、フィドルと笛とピアノで演奏し、思い切りとセンスの良いパーカッションが引き締めた佳作でした。当時の国産のケルト系の録音では群を抜いたアレンジの巧みさに舌を巻いたものです。そして音楽に対する大胆なアプローチにも感心しました。その代表はラストの〈ていんさぐぬ花〉で、あえて沖縄の匂いを消し、シャープなパーカッションが拡大するより大きなスケールの中で唄いきってみせた力業は、十年を経ても色褪せません。

5年後の《LJUS》(2013)では変化の大きさに眼を瞠りました。まずピアノが消えて、全面的にハープに交替しています。そして、素材はすべてスカンディナヴィア。ここではまず3人のゲスト・シンガーを迎えての歌に耳を惹かれました。とりわけ歌詞を日本語に置き換えて唄われる2曲は、日本語化の見事さとうたい手の咀嚼消化の徹底に感服しました。全体としてもアレンジはさらに練りこまれています。スキルとセンスともに一段と磨きのかかったパーカッションが、そのアレンジを多彩にいろどります。フィドルも「声」の幅が広がり、楽曲の生まれた場所の空気を感じさせます。本人たちであれ、誰であれ、これを凌ぐ録音を作るのはほとんど不可能とも思えました。

《TIME BLUE》から《LJUS》への変化は《Celtsittolke》(2010)と《Celtsittolke Live》(2012)で少し伺えます。前者ではフィドル、バウロン、

ピアノのトリオによるシンプルな組立てで、アイリッシュを演奏。後者では〈She Moved through the Fair〉が収められていますが、ピアノからハープに交替。

《LJUS》の手応えを本人たちも自覚していたのでしょうか。さらに5年後のこの最新作では、方向を変えています。《TIME BLUE》から《LJUS》への転換に比べれば、一見（一聴？）変化は小さいようにもみえます。

素材は今回もすべて北欧です。スウェーデンやノルウェー、デンマーク、フィンランドは、各々に音楽伝統の厚い地域で、伝統音楽の現代的展開にも熱心でもあります。アイルランドやスコットランドでもそうですが、音楽のジャンルの間の垣根が低い。とりわけ、フォーク・ミュージックとクラシック、ジャズのミュージシャンたちはおたがい相互交流しています。アバのベニー・アンダーソンは伝統音楽のアコーディオン・プレーヤーとしても知られます。スウェーデンでは1960年代から伝統音楽をジャズに取り入れる試みをしています。1970年代初め以降、ロックの洗礼を受けた若い世代による同時代音楽としての伝統音楽の展開もしてきています。

わが国のミュージシャンたちが、そうした成果に本格的に触れるのは前世紀末、デンマークのハウゴー&ホイロップやスウェーデンのヴェーセンなどを通じてですが、2010年代も後半になって、急速に関心が高まっているようにみえます。京都のドレクスキップと並んで、《LJUS》はそうした動きの先駆けでもありました。

それにしても、このアルバムでの北欧音楽の消化の徹底していることは、他には肩を並べられるものが見当りません。その消化は、精緻を極めたアレンジを施してゆくことで可能になったとも見えますし、またその消化があったればこそ、極限とも思えるアレンジができたとも思えます。あるいは各々が互いにあざないあって、どんどんと深みにはまっていったのかもしれませんが。

今回は歌はなく、すべて器楽曲。しかし、どの曲も実に「雄弁」です。アレンジの編み込み方は、前作と比べてもほとんど次元を異にするとと言えるほどに複雑に緻密になっています。どの楽器が何をやっているのか、うっかりするとわからなくなります。例えば[02]では、ハープからフィドル、ヴィオラ、オルガンへとメインのメロディが受け渡されてゆきます。受取る前も、受け渡した後も各々の楽器はハーモニーに回ったり、裏メロを奏でたり、時にはユニゾンにもなります。どの楽器もメインのメロディを演奏していない時もあります。

こうした手法はチーフテンズのお家芸で、クラシックからの借用ですが、この録音ではチーフテンズのものがごくプリミティブな試みに聞えてしまうくらい遙かに洗練されています。チーフテンズでは担当している楽器はユニゾンですし、渡してしまえば休みます。こちらでは、各楽器の関係も錯綜していて、簡単には追っていきません。時には眼が眩むほどですが、しかし、全体としては整然とし

て美しい。聴くたびに新鮮な曲が姿を顕わします。クラシックの管弦楽法なら、チーフテンズをモーツァルトとすれば、こちらはリムスキー・コルサコフやラヴェルの域にあります。というよりはジャズのビッグバンドの最先端に近い。マリア・シュナイダーの音楽や、あるいはいっそカマシ・ワシントンのものにも通じましょう。

[02]はパーカッションを外していますが、[03]では多彩なパーカッションがリピートごと、フレーズごとにカラーを変えてゆきます。ここではハーディガーディも加わって、[02]とは対照的なダイナミズムあふれる演奏。

例えていえば、ビザンティンのモザイク画、あるいはモロッコの緻密華麗な紋様を思い起こします。個々の要素をとりだすと、それぞれ勝手なことを勝手にやっているようですが、全体として見ると、鮮明で美しいイメージを生み出します。

細かい役割分担と相互の緻密なやりとりを重ねて複雑精緻なアレンジを編みだし、静謐かつダイナミックな美しさをかもしだす手法は、《LJUS》の〈Marionette Halling〉や〈Sleepers, Awake!〉の後半にすでに顕れています。もっとも編み目はずっと緻密になり、生み出されるイメージの豊饒さも一段と深い。

アレンジだけではありません。スキルの点ではまずフィドル。もともと深い響きが、一種鄙びた味わいを帯びてきました。いなたいといっちは失礼になるような威厳があります。[07]の後半のリードのタイム感は絶妙ですし、[06]で、ハーブに対してシンプルなりフというよりいくつかの音をドローン的に置いてゆくときの響き。これはハーダンガー・フェレで、また一段と響きが豊かです。そして[10]の後半での無伴奏ソロには、自然と背筋が伸びます。ちなみに[06]ではラストにダブル・ベースが残ってメロディを奏で、鉦がリーンと相槌を打つのが粋。

パーカッションのセンスにはもともと並はずれたものがありましたが、この鉦にも顕われるように、また一皮剥けたようでもあります。時にはまるでの外れな音を一見気まぐれにはさんだりもします。それが一々、はまってゆく時の快感は筆舌に尽くしがたい。随所に入れるビブラフォンやグロッケンシュピール、あるいは[08]でビートを刻む捻ってキリキリリリという音を出すもの（すみません、無知で名前を知りません）など、ユーモアのセンスが全体を明るくします。それもあって、この[08]はユーモラスなことではアルバム随一。ちなみに楽曲の美しさでは[10]が、豪華な愛らしさにあふれて、頭抜けています。無伴奏フィドルのソロに続く爆発するバンドのスリルには何度聴いても息を呑みます。

ハーブは難易度の高いことをやるわけではありません（[04]のハーモニクスを交互に入れるのは難しそうだが）、身体にすっかり馴染んでいます。これに比べてしまうと、《LJUS》の時はまだ初々しさがみえます。ギター的にリズムをつける時のアクセントの付け方はレベルが違います。

サポート陣ではアコーディオンの活躍が目を惹きます。参加している曲では、アンサンブルの一角として、メインの3人とまったく対等からみ合います。加えて、出番は多くないが、コントラバスがいい味。低域を支えるよりも、全体の膨らみを増します。

全体にテンポの選択がうまい。[08]の後半を除いて、アップテンポといえる曲は無く、ミドルからスローが基調ですが、参加しているミュージシャンはいずれもすぐれたリズム感覚を備え、曲の中でも自在に変化します。アルバムを通して聴いても、気持ちよく曲が流れる。

先にも触れましたが、これはフォーク・ミュージックの範疇ではないでしょう。スウェーデンでいえば、リエナ・ヴィツレマルクとアレ・メッセルがECMでやった"Nordan" Projectの手法とも違います。あそこにはまだジャズの手法を使う意識が働いています。フリーフォートは、各楽器が独立し、いわば自分の存在をぶつけ合います。シャナヒーでは、ミュージシャンの個性は明瞭ながら、たがいに最も気持ちがよくなる形の絡み方を見つけようとしています。

このアルバムは1個の「芸術品」と呼ぶべきでしょうが、グリーグ、シベリウスやニールセンのようなクラシックではもちろんありません。伝統音楽を素材とし、あくまでも素材の味を活かし、何かのひな型や枠組みにあてはめるのではなく、素材の潜在性を最大限に引き出し、楽曲そのもの、メロディそのものを可能性いっぱいまで展開しています。やはり言葉の最も広い意味で「ジャズ」と呼んでいいものではないか。あるいはむしろ、これもまたフォーク・ミュージックであり、フォーク・ミュージックの可能性を極限まで拡大している、と言うべきでしょうか。

ここに生まれているものは新しいものです。それも、新しいものを作ろうとして生まれたものではない。楽曲との対話のうちから生まれています。それは聴けばわかります。何かをめざして組み立てていったものではない。対話を繰り返しながら、楽曲の、音楽の向かおうとする方へどこまでも進んでいった。ですから複雑精緻でありながら、どこにもストレスがかかっていません。ごく自然に流れています。聴き手もごく自然に気持ちよくなります。聴くほどに、楽曲の内部へ、音楽の内部へと惹きこまれます。求心的ですが、通常求心的な音楽に付随する窮屈さがまったくありません。緊張と弛緩が同居しています。

シャナヒーのアルバムはいずれも録音が優秀ですが、これも精緻なアレンジとダイナミック・レンジの広いパーカッションをしっかりと捉えた録音が見事です。

<編集者追記>

シャナヒーの新譜"She was under the tree"はこちらから、送料・税込み2850円で購入できます。

<https://celtnofue.com/items/detail.html?id=798>

試聴動画はこちらです。

<https://www.youtube.com/watch?v=v7fXYHYQpHA>

■ (4)ジャン=ミシェル・ヴィヨン & イヴォン・リオウ さんのセッション

■ field 洲崎一彦

先日、我らがhatao氏が招聘したフランス・ブルゴーニュのフルート&ギターデュオ、ジャン=ミシェル・ヴィヨン & イヴォン・リオウのお2人が、fieldセッションに遊びに来てくれました。今回のツアーは各地のライブが大好評で、この日も京都拾得でのライブ後にふらりと遊びに来ていただきたい格好でした。

私も各地のライブ評判は耳にしていましたし、その昔、私達がアイルランドとブルターニュの違いも知らない頃にむさぼるように聴いていたCD群の中にあつたコルノグというバンドのフルート奏者がこのジャンさんなんだという事ぐらいしか知識が無かったのですが、今回のツアーの評判はちょっと私の往事のイメージ以上に大好評で、この日、拾得のライブに行く事ができなかった私は興味津々でご両人のセッション来訪をお迎えしたという次第です。

ウワサが広まるのは早いもので、彼らがfieldセッションを訪れるというウワサをどっからともなく聞きつけた人達がすでにセッションに大勢集まってる所に、彼らは現れました。

10人前後のセッションに彼らが入って行きます。さっそくまわりの人達と挨拶を交わしすぐに演奏が始まります。なんじゃこれは！さっきまでのセッションサウンドとまったく違うサウンドが瞬時に鳴り響きます。10人に2人が加わっただけですよ。それで何故こんなに音が変わってしまうのか！

しばらくはもう呆然とこの状況に身を置くしかありません。感動というよりも驚きです。

側にいた人が、この人はクラシック畑の人なのですが、すごい音色だ！とつぶやいています。あ。よく見るとジャンさんは隣の人フルートと楽器を交換して吹いているではないですか。それで、これほど違う音が出るなんて！

前にいたフルート吹きの方は、何をしているのかよくわからない！見たこともない奏法や！と声を出して驚いています。また、別の人は、ものすごい音圧や！とつぶやいています。

たしかに、これだけの人数で一齐に演奏しているのに、ただ1人のフルートの音がこれほどに耳に飛びこんで来るなんて初めて体験しました。音色、音圧とい

るいう表現はあるのですが、この場にいた皆が共通した大きなインパクトを感じていたのは間違いありません。

方や、対面位置でギターを弾いているイヴォンさん。決してガチャガチャかき鳴らすようなスタイルではありません。どちらかというと、丁寧に確実にストロークするタイプでいわゆるガンガン派手な音はまったくしないのですが、こちらと同じように、なんでこれだけの楽器に埋もれずその控えめなギターの音がこれほど際立つのか！というサウンドを出してしまう。

ぼうっと聴いていると、今ここで繰り広げられているセッションはこれほどの人数で行われているのではなくて、実はこのお2人のデュオ演奏なのではないかと錯覚してしまいそうになるのです。

もっと極端に表現すると、このお2人と他のセッションメンバーはまったく違う作業をしているのです。同じチューンを同じテンポで演奏しているという所で見かけ上は同じことをしているように見えるのですが、その実まったく違うことをしている。また、それをそのように自覚的に感じる人はこの場にはひとりも存在せず、皆がまったく同じ作業をしているのだという錯覚が唯一この場を成立させているに過ぎない。と、まあ、こんな風にまで感じさせる何かがありました。

前回の原稿で私は、

「日本で行われているアイリッシュセッションは、流れているベルトコンベヤーの上に次々と適切な音を皆で並んで置いていく工場の作業員のような動きではないんですかと。本当は目の前のベルトコンベヤーは勝手に動いているわけではないのです、それぞれの演奏者が自分の力で動かさないとそれは音楽にはならない」

というような事を書きましたが、まさにこれに少し付け加えなければいけない。このベルトコンベヤーも同じコンベヤーに各人が音を置いて行くのではなく、各人がそれぞれのベルトコンベヤーに音を順番に置いて行く作業をしている。

そして、ジャンさんとイヴォンさんは、こういう人達と並んですわっているのですが、彼らは彼ら2人に共通するベルトコンベヤーを自分達の音を使って2人で一緒に動かしている。と、まあこれぐらいに違う作業をしています。

圧巻は、終盤にやって来ました。お2人が恐らくブルターニュの舞曲を演奏し、こうなるとついて行けるのは我らがhatao氏ぐらいしかいないわけですが、それにつられてダンスをする一団が自然に輪を作って踊り出すという感動的な場面の後にやって来ました。

チューンがアイリッシュに戻り、また全員が演奏に参加する場面が始まります。そこで、誰がつないだのか、fieldセッションのラストチューンの定番曲である、とあるリールにつながりました。私は、内心、あ。まずい！と思います。何故かというところの時私の正面で演奏していたある人は、このチューンになるといつも極端に加速してしまうクセがあるのを知っていたからです。

セッションに参加した経験のある方なら共感していただけると思いますが、セッションで楽器を弾いているときに、誰かひとりがテンポを加速させるとまわりはどうしてもそれに従わざるを得なくなります。どうしてそうなるのかよく解りませんが、減速するのよりも加速するのに皆弱いというか自然に自分も合わせて加速してしまう。一旦こういう加速をすると止められなくなってしまう。するとどうなるかという、これに相互作用が働くのでこの曲はさらにどんどん加速して行ってしまうというような事が起こります。

こういうわけですから、この時、私は反射的に、あ。っと思ったのでした。

そして、確かにこのチューンに移った途端にフッと少し加速しかけた。しかし、次の瞬間に何か重い重石が乗っかるかのようにこの加速傾向はグッと押さえられ、心地よい躍動の内にこのセットが終了したのでした。

たった、2人の人間が10人の加速を止めたのです。普通のセッションではまず考えられない事が起こりました。

お2人と他の10人がまったく違う作業をしていると言いましたが、多数の違う作業に力を及ぼす凄い力を見たように思いました。そうです。そこに力があれば、ただ勝手に回っている自分だけのベルトコンベヤーの上に順番に音を置いているだけの人のベルトコンベヤーを勝手に回ってるのではなくて、隣の人の方で強引に動かすことが可能なんや！

これは、私にとって非常に新しい発見でした。

つまり、私のように理屈ごたごた書き並べるしか能の無い人間にとってはちょっとショックな事実なのですが、やはり、この圧倒的な演奏力がなければ、誰をも納得させることは出来ないのだ！という事を思い知らされた次第です。

あああ。と言って、私が今からそんな演奏力を身につけることなんて、ちょっと、気が遠くなるお話しですね。（す）

■ (5)オーケストラアレンジで聴くケルト・北欧の伝統音楽

■ 第9回 ハーティ：アイルランド交響曲

■ 吉山雄貴

突然ですが、私、交響曲はクラシック音楽の中でも、格別の地位をもつジャンルだと思うのです。

なにせ、評価の高い作品には交響曲が多く、また音楽の教科書に載るような大作曲家は、たいてい交響曲を書いています。クラシックと聞いて真っ先に思い浮かべるであろう、運命、第九、新世界などといったワードは、すべて交響曲の副

題や通称です。

交響曲は、(1)オーケストラで演奏する、(2)長さや楽器編成の点で大規模、(3)形式や構成を重視する、(4)通常4つの部分からなる、などの特徴をもちます。4つの部分の1つ1つを、「楽章」といいます。

実のところ、私は交響曲が概してニガテだったりするのですが、まあそれはさておき……。

交響曲のジャンルにも、伝統音楽を織りこんだ作品が存在します。それこそ今回とり上げる、その名もズバリ「アイルランド交響曲」！

作曲者は、ハミルトン・ハーティ（1879-1941）。北アイルランド出身です。ダウソウ州のヒルズバラという小さな町で生まれ、ベルファスト、ダブリン、ロンドンなどで活躍しました。

「アイルランド交響曲」は、ハーティの代表作。次の4楽章からなります。全体の長さは30分あまり。

第1楽章：ネイ湖岸にて

第2楽章：定期市の日

第3楽章：アントリムの丘陵にて

第4楽章：十二夜

下記の動画で、全曲を視聴できます。

<https://www.youtube.com/watch?v=g1ILN6pbDBk>

補足しますと、アントリムは、北アイルランドの中でも北東部に位置する州、およびその州都の名。アントリム州の北部および東部が、丘陵地帯となっているようです。

ネイ湖は北アイルランドのほぼ中央にある、イギリスおよびアイルランドで最大の湖。北と東で、アントリム州と接しています。アントリム高原を形成する玄武岩の陥没によって形作られた、とかなんとか。

十二夜とは、クリスマスの12日後、すなわち1月6日にあたる、「公現日」の前夜のこと。クリスマスのかざりは、この日に片づける習わしだそうです。シェイクスピアに同名の戯曲があります。

ともかく、この「アイルランド交響曲」。全編にわたって伝承曲のオンパレードです。楽章ごとに、以下の曲を引用しています。

第1楽章：Avenging and Bright、The Croppy Boy

第2楽章：The Blackberry Blossom、The Girl I left behind me

第3楽章：Jim!)n Mo Mh!)le St!)r

第4楽章：The Boyne Water

The Girl I left behind meは、本連載の第1回で紹介した、ルロイ・アンダー

ソンの「アイルランド組曲」の終曲としても、用いられました。愛されていますね。

それにしてもこの作品、やはり第1楽章が突出してイイ！ 私はこの楽章だけで、おなかいっぱいになります。

使用されているAvenging and Brightが、とてつもなくうつくしいんです。決然とした、ということばがピッタリの悲壮感にあふれています。

歌詞全体を見わたしながら曲名を意識すれば、「復讐の輝き」といったところ。これが原曲です。

<https://www.youtube.com/watch?v=W3qsuGolHnE>

歌詞はThe Sessionにも掲載されています。内容は、アイルランド神話のディアドラの物語にふれつつ、報復を誓うというもの。

<https://thesession.org/tunes/8225>

ディアドラは、アルスター王コノールのもとで、将来彼の妃となるべく育てられました。……どこの紫の上ですか？

ですが彼女は、王に仕えるニーシャ（ノイシュとも）という戦士に心をうばわれ、強引にかけおちを迫ります。最後は脅迫までされてしぶしぶ同意したニーシャは、コノール王によって罠にかけられ、あっけなく死亡。ディアドラも自ら命を絶ちます。

ケルト神話にはこのように、臣下が主君の妃を略奪するはなしが、かなり多いんです。なんでも、これがアーサー王伝説のランスロットや、『トリスタンとイゾルデ』に影響を与えているとか。

だがしかし、この歌詞、単に神話を題材にしているだけではないかもしれません。歌詞に、こんなことばがあるのです。

「エリンのひらめく剣はふり下ろさる」

「コノールの住処に赤き雲ぞ懸かる」

「追憶の故郷こそ甘美なれ」

「暴君に対する報いぞ何物にもまして甘き」。

エリンとはアイルランドの雅称です。赤はしばしば、イングランドを表します。第1回で言及した、Wearing Of The Greenという歌でもそうでした。そしてディアドラもまた、アイルランドの暗喩として用いられます。

そう考えるとあらふしぎ！ この歌、一気にイングランドに対するアイルランドの反抗を決意するものに早変わりします。

故郷が思い出の中にしか存在しないのは、うばわれているから。暴君はコノールと同時に、イギリス王をも表す、てワケ。

そもそも作詞者のトマス・ムーア。表向きは神話の時代の回想にみせかけて、実は祖国の独立を訴える詩を、実際に書いています。

Silent O Moyleという歌では、海神リルの4人の子どもたちが、白鳥に姿を変える呪いがとける日を待ち焦がれるエピソードに、自由を渴望するアイルランド人の心情を、重ね合わせています。

ぜったい確信犯（この用法は誤りです）ですって、この人。また奇しくも、ハーティもまた同じ神話を題材にした交響詩の作曲に着手し、未完のまま世を去りました。

Silent O Moyleの動画。

<https://www.youtube.com/watch?v=v3eqL382Ak>

「アイルランド交響曲」を聴けるCDとしては、なんといっても次のものがオススメです。

【ハーティ アイルランド交響曲 他】

アイルランド国立交響楽団

指揮：Proinnsias Duinn

録音年：1996年

レーベル：ナクソス

指揮者の？ Duinn。彼の名は、「リバーダンス」のサウンドトラックにも、記載されています。——リバーダンス・オーケストラの指揮者として。まさか同姓同名、同じ職業の別人、なんてコトはないと思います。

アイルランド人がアイルランド伝承曲をちりばめて書いたオーケストラ曲を振るのに、これ以上の適任者は、見あたりません。

また、「アイルランド交響曲」のほかにも2点、ハーティの作品が収録されています。

■ (6)ざっくり学ぶケルトの国の歴史（最終回）

■

■ 上岡 淳平

アイルランド共和国の成立に沸いている中、他のケルト地域はどうだったんだろう？かけ足で見よう。

● スコットランド

スコットランドって国は英国に反発したり、かと思ったら英国仲良くしちゃったり、なんともフワフワした態度を取ってたんだ。

そんなフワフワした国だったから、お隣アイルランドが独立運動に沸きあがってる時も「独立はしたいけど現実味はないよね～」とマイペースに暮らしてたんだって。

でも1960年ごろ、スコットランドの北側に油田を発見してから態度が一変。なぜかって？そりゃ、スコティッシュとしては「うちで見つけた大金をなぜロンドンに持って行かれるんだ？」と考えるのが当然ってもの。そしてついには、英国に「わしらも独立したいんじゃ！」と叫び始めたんだ。でも鉄の女（当時の英首相）には全く届かず、ほとんどすべての要求を拒否された挙句、ずいぶん荒んだ状況に陥ってしまった。（映画「トレインスポッティング」参照）

● ウェールズ

じゃあ、ウェールズはどうだろう。

ウェールズはというと、議会やら国の体制やらが確立するずっと前から英国の一部になっていたし、そもそも一時的にしか独立した国として統一したことがなかったし、二度の手痛い失敗で、およそ独立に関しては考えられなかった。もちろん、独立を望むグループも存在するけれど、アイルランドのようにその運動が全国で活性化するってことはなかったんだ。

その代わり（というのも変だけど）ウェールズ語を残す運動はずっと行っていて、アイルランドのゲール語よりずいぶんと効果を上げ、今でも独自の文化を守ることに成功している。

● マン島

もうひとつマン島はどうだろうか。

ブリテン島とアイルランド島の間ポチッと浮かんだ小さな島は、特に政治的な問題に巻き込まれず（小さすぎて気にもとめられなかったのかな）1000年以上もケルトの文化を保っている。

ケルト系の人々が流れ込んだあと、ヴァイキングに征服されたので、現在マン島に暮らす人たちは「ヴァイキングの末裔」だと自負しているんだとか。

アイルランドでは不自然に残ったイギリス領（北アイルランド）の問題がずっと続いていた。この問題は残念なことに、今でも解決していないんだけどね。

● 独立以降のアイルランド

1995年頃から、アイルランドの首都ダブリンは急速な経済成長を遂げ、世界からケルトの虎と呼ばれたりもしたんだ。英国では、それまでロンドンの議会在取り仕切っていたスコットランドやウェールズ、北アイルランドの国政を「それぞれの地方でやりなさい」と方針転換した。

おかげで、今ではどの都市も自分の議会を持てるようになった。

つい先日、スコットランド議会で独立を主張する政党が過半数を超えたのをきっかけに、2014年秋に「スコットランドの英国からの独立」を問う歴史的な住民投票が行われ、それは否決されたんだけど、この選挙は世界中に大きな影響を与えたりもした。

ウェールズと北イングランドは今のところ特に問題はないけど、今後どうなるかはわからない。

ちなみに歴史の中のケルト音楽というのは、平和な時代には癒しと交流の役割を果たし、激動の時代には今のネットやTwitterのような役割を果たしたんだ。今みたいに「英国による暴挙なう。」とつぶやくことはできなかったの、そういった事件を歌にして広めていく、っていう風にね。（ということは英国の悪口が多いのかな？）

それらはTwitterより上等なことに、当時の人々だけではなく「こんな過去があったことを忘れてはいけない」って思いを込めて、その子孫にも伝えられていったんだね。「伝承音楽」ってのはそういった背景があるわけで、そうやって伝えられてきた音楽をぼくらは聴いたり演奏したりしているんだ。そう思うと、なかなか口マンがあると思いませんか？

牧歌的で穏やかとは言えない歴史も多かったけど、今ではアイルランド、北アイルランド、スコットランド、ウェールズ、マン島、コーンウォール、ブルターニュ、ガリシアの人たち、きっとこんな気持ちで今夜も音楽を奏でているんじゃないかな。

「おちこんだりもしたけれど、私はげんきです。」

ざっくり学ぶケルトの国の歴史（完）

■ (7) 編集後記 ■

11月下旬から一気に冬がやってきました。そして今年も残りあと1ヶ月。色々音楽イベントが多いですから、身体に気をつけつつ、充実した年末をお過ごしください。

当メルマガ及び「ケルトの笛屋さん」のコラム・コーナーでは、ライターを随時募集しています。ケルト音楽に関係することで、他のメディアでは読め

ないもの、読者が興味を持ちそうな話題を執筆ください。頻度については、一度にまとめてお送りくださっても構いませんし、毎月の連載形式でも結構です。ご応募に際しては、

- ・ CDレビュー
- ・ 日本人演奏家の紹介
- ・ 音楽家や職人へのインタビュー
- ・ 音楽旅行記

などの話題で1000文字程度までで一本記事をお書きください。ご相談の上で、「ケルトの笛屋さん」に掲載させていただく場合は、1文字あたり0.5円で買い取りいたします。ご応募は info@celtnofue.com までどうぞ。

★ライブスケジュールは以下のページでカレンダー形式で掲載していますのでご利用下さい。

<https://celtnofue.com/community/event/>

★全国のセッション情報はこちら

https://celtnofue.com/play/session_info.html

★全国の音楽教室情報はこちら

https://celtnofue.com/play/lesson_wide.html

クラン・コラ：アイルランド音楽の森（月2回刊）

発行元：ケルトの笛屋さん

Editor : hatao

*掲載された内容を許可無く転載することをご遠慮ください。
*著作権はそれぞれの記事の執筆者が有します。
*ご意見・ご質問・ご投稿は info@celtnofue.com へどうぞ。
*ウェブ・サイトは <http://www.celtnofue.com/>
*登録・解除手続きはこちらからどうぞ。
まぐまぐ！ <http://www.mag2.com/m/0000063978.htm>
Melma！ http://melma.com/backnumber_98839/

*バックナンバーは最新号のみ、下記URLで閲覧できます。それ以前の号をご希望の方は編集部までご連絡下さい。

まぐまぐ <http://www.mag2.com/m/0000063978.htm>

Melma! http://www.melma.com/backnumber_98839/

.....↓ メルマ！PR ↓.....

★-----★

ドキッ!!人生は運命ではなく腸で決まるってホント？

★-----★

↓詳しくはコチラをクリック

<http://rd.melma.com/ad?d=60q0URsFP0F1H66n60GFUCnyP1Fac4Ba0633f1d6>

.....↑ メルマ！PR ↑.....

■今回の記事はいかがでしたか？

下記ページより、あなたが記事の評価を行う事ができます！

http://melma.com/score_g0A1n6Anb0wFFCRyU1AaQ4wad8bd4b1b/

このメルマガのバックナンバーやメルマガ解除はこちら

http://melma.com/backnumber_98839/

その他のメルマガ解除や登録メルマガの検索はこちら

<http://melma.com/contents/taikai/>
